

「韓国伝統的打楽器杖鼓にみる身体動作の研究」

裴, 永珍

<https://doi.org/10.15017/1807048>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 裴 永 珍

論 文 名 : 「韓国の伝統的打楽器杖鼓にみる身体動作の研究」

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、韓国の打楽器である杖鼓の打奏時における身体動作と、その音楽との関係を知ること、さらに、その結果を演奏の技芸継承や教育に役立てることを目的とする。杖鼓に限らず、韓国や日本の伝統的な楽器の演奏において演奏家が心掛けていることは、聴衆との身振りのコミュニケーションである。すなわち、発せられる音とともに、素早く見せたり大きく見せたり美しく見せる余剰的な身振りが、よりよく演奏するために必要であると認識されている。本研究のこれまでの研究にない論点は、音の記述方法の提案と分析に加えて、この余剰身体動作を主観的に考察した点である。

本研究は、第 1 部の「杖鼓の打奏における余剰身体動作の認識と記述」と第 2 部の「動作表を用いた杖鼓リズムの再検討」から構成されている。

第 1 部の第 1 章では、杖鼓の歴史と楽器について検討した。始めに、三国時代から統一新羅時代までにかけての、古墳と梵鐘に描かれている杖鼓の形象について述べた。次に、日本に平安時代に制度化された高麗楽に注目し、高麗楽で奏せられている三ノ鼓や唐楽で使われている鞞鼓と杖鼓とを比較した。この比較により、日本の三ノ鼓が韓国の杖鼓の祖型であることを述べた。また、現在の韓国の音楽における杖鼓の位置づけを述べた。次に、杖鼓の材質や構造そして奏法について述べた。杖鼓は、皮が貼ってある隅を桴で打つため、杖鼓の桴は、弾性力すなわち復元性を持っている。打奏に際して、桴に強いしなりが生じ、自然に桴先が皮の中央に当り音が発する。また、瞬間的な手首の動きで打つので力を必要としない。

第 2 章では、打奏時における基本的な身体動作の特徴を調べるために、プロ 2 名の演奏家を被験者とし、センサとスペクトログラムを用いて打奏時における手首の動作の特徴を検討した。比較のために初心者 2 名のデータも分析した。左手打法においては、手首の左方向への振りが重要な意味を持つ可能性が、右手打法においては、円を描くような動作が重要な身体動作である可能性が示唆された。次に、杖鼓の打奏時の前動作が、音色の生成に関与しない身体動作、すなわち余剰身体動作を含むかどうかを検討した。スペクトログラムの比較結果にもとづき、振りありと振りなしの動作の音色に差が認められるか否かを聴取実験により調べた。この結果、

左正打及び右正打どちらも、音色に変化が認められないことから、前動作が音色の生成に関らない余剰身体動作を含むことが明らかになった。

第 3 章では、従来記譜法の問題点の検討し余剰身体動作を適切に記述するための演奏法表記システムについて検討した。杖鼓のリズムパターンは、井間譜と呼ばれる升目のある伝統的楽譜に記述されてきたが、この記譜では、リズムの微妙な変動や身体動作を表記することができない。まず、杖鼓のリズムパターンである長短について、打法、使用手、胴体、呼吸、余剰身体動作、高低、強弱、緊張・弛緩の関係、交差を同時に知ることができる演奏表記システムを動作表として提案した。次に、動作表の演奏教育における有効性の有無を調べるために、典型的な長短のリズムであるグッコリ長短とジャジンモリ長短を、従来譜を用いた教習法と動作表を用いた教習法とにより、被験者 4 名にそれぞれ習得させ、アンケート調査と演奏評価をもとに検討した。その結果、どちらの長短についても、動作表を用いた演奏が、従来譜を用いた演奏よりも、本来の自然なリズムであるとの評価を得た。以上から、動作表を用いた練習が杖鼓のリズムの習得に有効であることが確かめられた。

第 2 部の第 4 章では、動作表を用いて、リズム体系としての長短の身体動作の構造を検討した。検討対象はソルチャングのリズム 137 種とした。ソルチャングを記述対象とした理由は、ソルチャングが杖鼓のリズムのレパートリーのなかでも典型的なリズムの系列であり、かつこれまで記述が難しいとされてきたレパートリーであるからである。ソルチャング・リズムのそれぞれについて、動作表を用いることにより、打法、使用手、胴体、呼吸、余剰身体動作、高低、強弱、緊張・弛緩の関係、交差をデータ化した。さらに、余剰身体動作の役割を考慮しつつ 137 の長短それぞれの特徴について論じた。

第 5 章では、第 4 章で記述したソルチャングのリズム 137 種にみる身体動作と音楽との相互作用について再検討し、杖鼓の演奏における余剰身体動作の役割について考察した。ソルチャングの 137 種のリズムの分類結果をもとに、まず、リズムパターンにおけるアクセントと身体動作との関係を検討した。次に、このアクセントのリズム的实践において、音響の生成に直接関与しない余剰身体動作がどのような役割を果たしているのかについて検討した。次に、この余剰身体動作と、打奏時における身体の円運動との関係について検討した。次に、円運動の生成とソルチャングを特徴づける 3 拍子系リズムの関係について検討した。以上の検討から、ソルチャングのリズム的实践において、余剰身体動作を伴う打法が、音楽と身体のリズムの融合を媒介していることが明らかになった。

第 6 章では、各章で得た結果を総括するとともに、本研究で得られた知見を杖鼓の技芸継承や教育現場で役立てるために、音楽実践にどのように取り組んでいくことが必要であるかを論じた。